

男と女の不完全マニユアル

太陽の男と女

薄井ゆづじ



株式会社 ウィアックス

太陽の男と女

101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
終焉	録音	旅人	幻覚	滝壺	人形	満月	服従	神様	計算	砂漠

砂漠

のどが渴いた。

何日も、さまよっている。

私の目の前には、砂の丘が果てしなくつづいている。前も後ろも、右も左も、果てしない砂丘だ。

迷ってしまったのだ。観光で砂漠の町を訪れて、散歩がてら歩きはじめたら前後がわからなくなり、果てしない砂丘のまっただ中にいた。そして何日もさまよっている。

行く手に、何か黒いものが見えた。

砂だらけの世界に、黒い棒のようなものがぽつんと立っている。近づいていくとそれは女だった。黒い布を巻きつけた、背の高い、大きな目をした異国的な魅力を放つ女が、笑みを浮かべながら、

「どうしたの」と私に言った。「そこで何をしているの」

「迷ったんだ」

「人生に？」

「迷いこんだんだよ、砂漠に」

「そういうことが好きなの？」

妙なことだ。周囲は果てしなく砂丘がつづいている。この女は、いったい、どこから歩いてきたのだろう。

異国の女だと思われるが、なぜ言葉が通じるのだろうか。

「のどが渴いたんだ。三日間、一滴の水も飲んでいない」

「そうなの」女は嬉しそうに言った。「三日間、一滴もお水を飲まないのが、あなたの趣味なのね。可愛い」黒い布をまとった女は、ごく普通に、楽しそうに話をしている。わざと意地悪なことを言っているのではなく、本当に私が、好きこのんでこうしていると思っていて、それが面白いのだと言って笑った。

「お願いだから、水を飲ませてくれないか」

「ないもの」

「じゃあ、町まで連れていってくれ」

「ないもの」

「だったらきみは、どこから来たんだ」

つう、と腕を伸ばして、砂漠の一点を指した。指す方向も砂丘で、町のようなものは見えない。

「あつちに町があるのか？」

「ないわ」女は、普通に言った。意地悪そうでもなく、残念そうでもなく、からかっている様子もない。事実を告げているだけ、というような声だった。「町を探して歩いているのね」

「そうだけど、ちよつと違う。町から歩きはじめて、迷ってしまったんだ。お願いだから、水を。でなければ果物とか……」

「お水を探して旅をしているの？」

「そうだ」

違うけれど、そうだとしか説明する気力がなかった。私は、水を探す目的のために、砂漠で迷ったりはしな

い。

「あなたの足元にあるのよ」

「え？」

「あなたが探しているものは、あなたのすぐ足元にある。有名な言葉だから、あなたも知っているでしょう」

「聞いたことは、ある。それより、水を……」

「だから、あなたの足元にあるの。この砂漠の下には巨大な湖があつて、どこを掘っていつても、その湖に突き当たると。そんなことも知らないでお水を欲しがると、変な人」

議論したり、反論したりしている余裕はなかった。私は足元の砂を手で掘りはじめた。さらさらとした砂は、掘ってもすぐに埋まってしまう、何度かかき出していくと、やっと小さなくぼみが見えてきた。しかし水は一滴も出ないし、水の気配もない。

「何をしてるの？」

「水を。この下に湖があるんだろう？」

「そうよ。でも、何百メートルも下なの。手で掘ったりできないくらいの地底に、巨大な湖があるの。きれいな湖でね、澄んだお水は冷たくて、とっても美味しいの」

その言葉を聞くだけで、のどが潤れきっている私は目眩がした。

「水……を……」

「そんなにお水が好きなの。おかしい人。ねえ、あたしとお水と、どっちが欲しいの？」

ああ、なんだってこの女は、こんなときにこんな質問をするのだ。そうか、と私は思う。全世界の女性は、こんなときにかぎって、必ず男にこんな質問をするのだ。「どっちが好き？」と。